

2026年9月6日（日）主日朝礼拝説教

『からし種一粒の信仰』井上隆晶牧師

コリントの信徒への手紙二 13 章 5～8 節、マタイによる福音書 17 章 14～20 節

①【悪霊を追い出すことができなかった弟子たち】

イエス様たちが山から降りて来られると、ある人が近寄ってきてひざまずき、「主よ、息子を憐れんでください。てんかんでひどく苦しんでいます。度々火の中や水の中に倒れるのです。お弟子たちのところに連れて来ましたが、治すことができませんでした。」（マタイ 17：15～16）といいました。父親は息子を癒してもらおうと連れて来たのです。ところがイエス様が留守だったので、弟子たちに頼んだのですが、彼らには癒せませんでした。てんかんというのは脳の機能障がいです。口から泡を出し、体が硬直し、白眼になるので当時は悪霊につかれたのだと思われました。もちろん悪霊の業ではなく病気です。しかしこの病気に対する偏見や恐れを利用して悪霊は入ってきます。チャネリングといって、チャンネルを合わせてくれないと、つまり同意してくれないと悪霊は人の中に入れず、その人を支配できないのです。悪霊の働きは人間を恐怖や偏見で縛りつけて硬くさせ、自由を奪い、破壊することにあります。一方、聖霊の働きは恐れや偏見から解放し、生き方を自由にさせます。

②【信仰と信心の違い】

父親の言葉を聞いて、イエス様は弟子たちの信仰のなさに驚き、こう言われました。「なんと信仰のない、よこしまな時代なのか。いつまでわたしはあなたがたと共にいられようか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか。その子をここに、わたしのところに連れて来なさい。」（マタイ 17：17）イエス様が叱られると、悪霊は出て行き、その子供は癒されました。その後、弟子たちは恥ずかしかったのでしょうか、ひそかにイエス様のところにやってきて「なぜ、私たちは悪霊を追い出せなかったのでしょうか」と尋ねると、イエス様は「信仰が薄いからだ。はっきり言うておく。もし、からし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かって、『ここからあそこに移れ』と命じても、そのとおりになる。あなたがたにできないことは何もない。」（ヨハネ 17：20）と言われました。

「信仰が薄い」という言葉を聞いて、私たちは「自分是从し種一粒ほどの信仰もないから奇跡を行えないのだ、もっと熱心に信じなければならない」と読んでいるのではないのでしょうか。私も信仰に入りたての頃はそう読んでいました。カルト宗教の人たちはキリスト教徒よりも実に熱心です。日本を変えられる、家族を救えると思って莫大な献金をし、非常に熱心に信じて、伝道をしてきました。彼らのようになれということを言っているのでしょうか。そうではないのです。信心と信仰は違うということを理解しておきましょう。「信心」とは「信じる心」

ですから、人間から出るものです。一方「信仰」とは「信じて仰ぐ対象」ですから、教えられるものです。信心は誰の心にもあります。信心は神がすべての人間に植えつけたもので、見えざる神を求める心です。4世紀のヒッポのアウグスティヌスは「人間はどんな偽りの愛にも、ひきずられるほど愛に飢えている」といいましたが、自分を満たしてくれるものを何であつても求めてしまうのです。しかし、キリスト教信仰は与えられるものであつて、人間の中からは出て来ません。なぜなら信仰は賜物だからです。「あなたがたは恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるものではなく、神の賜物です。」(エフェソ2:8)

③【信仰は日々、もらわなければ失われる】

信仰は神によって与えられるものであつて、私たちの中からは出て来ないので、日々神の所にもらいに行かなければならないのです。

●昔、荒れ野を40年間旅したイスラエルの民に、神様は天からマナという不思議なパンを与えられました。そのマナは毎日、朝に集めなければならず、昼過ぎに集めに行っても溶けしまい、手に入れることは出来ませんでした。また、翌日までとっておいたら虫がついて臭くなり食べることができなかったといひます。それが出エジプト記の中に書かれています。「彼らは朝ごとにそれぞれ必要な分を集めた。日が高くなると、それは溶けてしまった。」(出エジプト16:21)

この出来事は、イスラエルの人たちに行われた神様の信仰教育であり、後世の私たちに対しては教訓として与えられたものです。すなわち天のもの、信仰は毎朝、集めなければならぬということ。そして信仰は次の日まで取っておくことはできないのです。聖書の知識は記憶として人の中に残りますが、信仰は一日しかもたないのです。知識はあつても信じる力がないのです。いつも私が言っているように、私たちは電気器具のようなものです。コンセントソケットにプラグを差し込んだら、向こうから電気が入って来るので器具は動きます。私たちも信仰がないまま礼拝堂に来て、聖書朗読を始め、祈りを始めたら、信仰が向こうから入って来て信者になるのです。まず黙って修道することです。

④【からし種一粒の信仰とは】

「なんと信仰のない、時代なのか」とイエス様は嘆かれましたが、「信仰」というところを「キリスト」と置き換えたら意味が分かるでしょう。「何とキリストのいない時代なのか、何とキリストなしで何かをしようとする時代なのか」という意味です。弟子たちの問題は、キリスト無しで自分たちの力で信仰ができる、神の業が行えると思ひ込んでいたことでした。「ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実をむすぶことはできない。」(ヨハネ15:4)、「わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。」(ヨハネ15:5)という言葉で弟子たちは本気で聞いておらず、私たちも本気で聞いていません。キリストから離

れた弟子たちの信仰は枯れ、キリストという塩気を失った弟子たちは何の役に立たない者になったのです。信心では悪霊は追い出せません。信仰がなければ（キリストでなければ）追い出せないのです。

あなたの熱心さや祈りの時間や、献金の額が足りないのではなくて、キリストが足りないのです。信仰が薄いというのは、キリストが薄いという意味です。あなたを見たら「私」ばかりになっていて「キリスト」が消えそうになっているのです。「からし種一粒ほどの信仰」とは、キリストから出た信仰です。キリストから出た信仰があれば、キリストから出た命があれば、それは種粒ほどわずかであったとしても、ものすごい力と効果を表すというのです。なぜなら神から出た言葉も信仰も、必ず神の望むことを成し遂げ、神が与えた使命を必ず果たすからです。

（イザヤ 55：11）カナンの女の信仰を思い出しましょう。彼女は「パンくずで結構です。それで私も娘も救われます。」と信じました。百人隊長の信仰を思い出してください。「ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕は癒されます。」

（マタイ 8：8）と信じました。

●「1987年ヨハネ・パウロ二世は9月17日サンフランシスコのドローレス・ミッション教会でエイズ患者に接見していました。教皇はエイズ患者に「神はあなたたちを差別することなく、際限なく、無条件に愛しておられる」といって一人一人に声をかけ、握手をしていました。その時、突然、青い目の小さなブランドン・オー・ロックくんが抱かれていた父親の腕を振り払って、教皇の懷に飛び込んで来たのです。輸血でエイズに感染してしまった5歳の子にも、苦悩の毎日が始まりました。教皇は何のためらいもなく、その子のふくれ上がった顔の傷に接吻なされた時、アメリカの良心はそこに「教皇の心」以上に、「イエスの心」を読み取ったことでしょう。」

キリストは人間の苦しみに共感するだけでなく、その人間の病を負い、罪を負い、死を負い、分かち合います。良いものだったら誰でも分かち合いますが、嫌なものを誰が分かち合ってくれるというのでしょうか。このような神を見たことがあります。誰も思ってもみなかった神のイメージがここに 있습니다。神は底知れぬ愛、あなたを見捨てない愛であるということです。モンテスキューは「真に偉大なものは人間の上にあるのではない、人間と共にある」といいましたが、キリストの偉大さは、私のような罪深い者と共にいてくださる、この私と一体になって下さることです。だからこそ「からし種一粒」でも十分なのです。このからし種一粒のキリストさえ、あなたの中に埋まっていたら、あなたは必ず復活するからです。この種は死を飲み込む、ものすごい命を持っているからです。主が言われた言葉を思い出しましょう。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば多くの実を結ぶ。」（ヨハネ 12：24）栄光がこの一粒の種にありますように。